

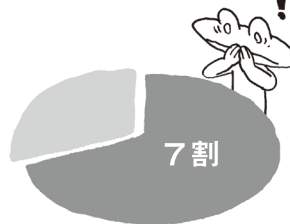
病は知から

がんによる痛み

多くのがん患者さんが、がんそのものの症状以外に、痛みやだるさなどの「身体的な症状」や、不安・落ち込みなどの「心のつらさ」を経験します。がん治療では、これらに対しても適切なケアを行っていきます。

「がんによる痛み」って、どんなもの？

がん患者さんの約7割が痛みを経験



がん患者さんの多くが経験する「痛み」。痛みの種類や痛む部位はさまざまですが、ほとんどは治療によって抑えることが可能です。

がん自体の痛みだけではない



治療により起こる痛みや、免疫力・筋力の低下によって出てくる痛み、倦怠感、不安や落ち込みなど心のつらさも含まれます。

「痛い」と伝えることが大切



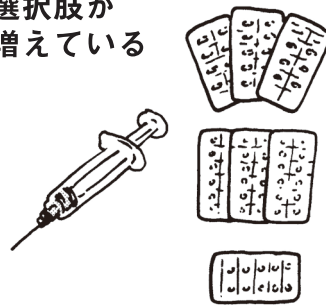
痛みがあると、生活の妨げになるだけでなく、がんの治療自体が難しくなることも。我慢する必要は全くありません。

がんの治療と同時進行



痛みの治療は早い段階から始めることが大切。がんの治療と並行して、痛みへのケアを行います。

選択肢が増えている



近年、痛み止めの薬の種類がかなり増えたほか、神経ブロックなどの治療法もあります。

医療用麻薬は安全です



医療用麻薬は、痛みのある人に適切に使用すれば安全で効果的な治療法です。

がんに向き合う患者さんに寄り添う 伝えてほしい「がんによる痛み」

がん患者さんとご家族が抱える「つらさ」は実にさまざま。その「つらさ」を和らげる治療について、ペインクリニック部の先生に聞きました。



ご本人にしか分からない痛み。我慢せずに伝えてください。

患者さんのがんの「つらさ」から守りたい。それが緩和ケアチームの想いです。

ペインクリニック部 廣瀬 宗孝 主任教授

「痛み」は本人にしか分からなくてつらいものです。私たちはまず、患者さんの言葉や検査の結果などから痛みの種類を分類し、原因を探っていきます。痛みの種類としては、ケガなどと同じく炎症による痛みである「侵害受容性疼痛」、神経が圧迫・障害されて起こる「神経障害性疼痛」のほか、心因性の痛みなどがあります。原因の分からないものもあり、がんによる痛みの場合、複数の種類の痛みが重なっていることも少なくありません。痛みのある部分だけでなく、状態をトータルで診る必要があります。このため兵庫医科大学病院では、医師、看護師、薬剤師、臨床心理技師、理学療法士、医療ソーシャルワーカー、歯科衛生士というメンバーで構成された緩和ケアチームを中心に、痛みを含めたがんの「つらさ」に対して治療を行っています。

緩和ケアという、治療が終わってから行うものと思われがちですが、痛みの治療は、がん自体の治療と並行して、早い段階から始めることが大切。薬物療法だけでなく、時には局所麻酔により神経の伝達を遮る神経ブロック療法、脊髄に微弱な電流を流して痛みを和らげる脊髄刺激療法などを用いて治療を行っています。医療用麻薬については誤解されていることが多いですが、痛みに対して適切に使用すれば安全です。最近の良い薬が出てきて、選択肢も広がっています。がんによる痛みの治療は、がん自体の治療を行う診療科との連携が重要。カンファレンスや病棟に出向くなどして、治療内容などの把握に努めています。

緩和ケアチームは、リハビリや口腔ケアなども含め、さまざまなアプローチから、がん患者さんや時にはご家族に対してケアを行います。がんの「つらさ」を少しでも抑え、その方らしい生活を送っていただけるよう、患者さんやご家族の気持ちにしっかりと向き合っています。